

茅白丸於八季

占有者が建物ヲ毀壞シ又ハ字娘ノ採伐ヲ為ス

可カラサル樹木ヲ採伐シ或ハ其以前ニ於テ未

女採掘セズ然ツテ其產出物ハ未タ果実ノ性質

ヲ有セザル石坑ヲ採掘シ又ハ如キ場合アルハ

ニ此時ニ於テ占有者ハ所有者ニ對シ損害ノ賠

償ヲ為スコト至当ナリト又然レトモ此点ニ於

テハ善意ノ占有者ト惡意ノ占有者トノ間ニ一

個ノ新メナル差異アルヲ窺ハルニ

惡意ノ占有者ハ此ノ如キ場合ニ於テ自己ノ別



失ヨリ生ズル義務ヲ有スルモノナリ申キ其為  
 シタル民事上ノ犯罪又ハ或ル場合ニ於テハ刑  
 事上ノ犯罪ヨリ生ズル責任ヲ負ハサレテ得ズ  
 之レニ及ビテ善意ノ有者ハ常ニ不当ノ利得  
 ニ基テ義務ヲ有スルニ止マレ此ニ於テ善意ノ  
 有者ノ義務ト善意ノ有者ノ義務トハ法文  
 ニ於テ明白スル如ク廣狹ノ差異アルモノナリ  
 蓋シ善意ノ有者ニ於テハ元来自己ノ物ナリ  
 小位ニ之ヲ使用シ若クハ濫用シタルモノナリ  
 ガ故ニ未ダ之シラシテ不注意若クハ收益ノ監

意ヲ為シタリトノ過失ノ責任ヲ負ハシム可キ



十  
故ニ事  
父之シ  
テ不注  
意若ク  
ハ收益  
ノ監

妄ヲ告シタリトノ過失ノ責任ヲ負ハシム可キ

ニ訓ラサレナリ

且ツ此ノ如キ場合ニ於テハ善意ノ占有者が單

ニ自己ノ物ナリト確信シタルニ止マルヤ或ハ

正橋索ヲ有シタルヤヲ區別スルノ必要アラズ

惟占有者が正直ナリシヤ、~~或~~將タ不正直ナリシ

ヤヲ區別スルヲ以テ足シリト為ス

時効即チ所在橋ノ取得ノ完全ナル推定ハ占有

ノ効力中ニモ大ナルモノナルコトハ已ニ之ヲ

述ベタリ然レドモ時効ノ事タルヤ今詳細ノ説



明ヲ為サズ何トナシハ法律ノ定メタル證據ノ  
方法トシテ特ニ證據篇ニ詳細ノ規定ヲ為セバ  
ナリ

第百九於九条

占取ニ附屬セシメタル種々ノ効力ハ以テ、占有  
が或ル條件ノ屢々遂ケル如ク單純ナル事實ニ  
止マラズシテ至少一個ノ權利ナルニトテ眼力  
ニシルニ足ルヤシテ此權利タルヤ物ノ上  
ニ存スル權利ニシテ本法ノ所措物權ナリ且ツ  
占有が事實ノミニ止マラズシテ權利ナル



占有が事實ノミニ止マラズシテ權利ナリ

、證據ハ仍ホ占有ノ担保トシテ法律ノ要ハ  
ル占有訴権ノ存在ニ因テ蓋之ヲ明カナラシ  
ムルコトヲ得ヤシ

本法ニ於テモ近世歐洲諸國ノ法律ト曰ハク  
民法ニ於テ認メタル諸種ノ占有訴権ヲ採用セ  
リ本条ハ占有訴権ヲ列記シ而シテ其二個ノ目  
的ヲ指示スルヲ以テ目的ト爲ス占有訴権ノ二  
個ノ目的トハ何ゾマ曰ク妨害セラシムル  
ノ欲持保存ヲ爲シ且ツ奪ムルハ占有ノ回復  
ヲ爲スコト是ナリ



占有訴訟ニ関スル規則ニシテ諸種ノ占有訴訟  
ニ共通スルキモノアリ又其例ニ於テ共通スル  
カラス事ニ或ル種ノ占有訴訟ニノミ適用スル  
キモノアリ此共通ノ規則ト特別ノ規則トハ次  
条以下ニ於テ之ヲ明示スル

### 第二百条

法律ニ於テ事實上ノ妨害ト名クル所ノモノハ  
容易ニ之ヲ解スルコトヲ得ヘシ即チ一人ガ物  
ノ占有ヲ為スニ當リ他人カ占有ノ爲メヲ行ヒ  
因テ其占有ヲ妨ゲ又ハ其占有ノ利益ヲ減少シ

若クハ至ク之ヲ失ハシメントスル如キニト有



田其占有者又ハ其占有ノ利益ヲ若クシ

若クハ至ク之ヲ失ハシメントスル如キニト有

ルトキハ是レ事實上ノ妨害ナリト又例令ハ占

有ノ目的又ハ土地若クハ家屋ノ全部又ハ一部

ノ占領或ハ占有ノ目的又ハ土地又ハ庭園ヲ通

シテ絶エズ通行ヲ為シカ如キ若クハ占有地ニ

存スル井戸水溜等ノ水ヲ汲取ルノ處為、占有地

ニ於テ地役又ハ其他ノ物權ニ基クニ執ラサレ

バ為スニトヲ得ベカラザル工事ヲ施コズノ處

為リ如キ是ナリ

權利上ノ妨害ハ占有者ト契約ヲ為シ又ハ土地



ノ債借人ニ對シ裁判所ト裁判所外トヲ問ハズ

或ル請求ヲ為スル如キ又ハ其借貸借ノ更新ヲ

為ス所為ノ如キヲ認フ何トナレバ此ノ如キ所

為ハ凡テ第一ノ債借人即チ占有者ノ占有ニ及

對スル主體ヲ包含スル所為ナレバナリ又占有

者ニ對シテ或ル請求ヲ為シ而シテ占有物ノ至

部若クハ一部ヲ失ハシメントスル如キモ亦權

利上ノ妨害ナリトス此場合ニ於テ妨害ヲ為シ

タルモノが法廷ニ於テ請求ヲ為スニ至ラサル

トキハ占有者ハ自カラ進ンデ占有訴權ヲ起シ



是レニ申テ妨害ヲ止メシムルニトテ得心シ占  
有者自カラ訴ヲ受ケタムトキハ因ヨリ権利上  
ノ妨害ヲ受ケタムモノナリトテ申カナリト至  
ドモ此場合ニ於テハ右有者ヨリ訴權ヲ提出ス  
ルニトテ抗弁ノ方法ニ因テ自カラ占有ヲ完  
フ之心シ然レトモ右有者ハ本權者トシテ占有ノ  
訴ニ於テ被告トナリタムトキ又訴ニ因テ自カラ  
占有有訴權ヲ提出シ得心キコトハ第二頁於条  
ニ於テ之ヲ看ハルニ  
法文ニ從フトキハ占有ニ對スル妨害カ之ヲ為



之夕凡天ノニ於テ占有ニ及對之凡主張ヲ含ム  
コトヲ必要ト爲ス故ニ妨害者ニ於テ權利ノ基  
本即チ所有權ノ主張ヲ爲スカ然ラザレバ占有  
ヲ主張スルニトヲ必要トス然ラサレハ妨害ハ  
占有權ニ對スル妨害ニ非ラズシテ惟占有者ノ  
一身ニ對シ如ハタル妨害ナルニ過キサル可シ  
而シテ此妨害ハ或ハ民事上ノ犯罪又ハコト有  
ルニ及テ時ニテハ刑事上ノ犯罪ヲ組成スルコ  
ト亦凡心ニ例之ニ隣人が親望ヲ妨ガル樹木ヲ  
毀損シ若クハ家畜ヲ殺シタル如キ所爲是ナリ



此場合ニ於テハ占有者ハ隣人ニ對シテ損害賠  
 償ノ對人訴訟權ヲ提起スルコトヲ得心ニトモ  
 毛保持ノ訴權トシテ占有者訴權ヲ提起スルコト  
 能ハズ  
 保持ノ占有訴訟權ノ物上訴權又ハ性質ニ由テハ  
 少シク説明ヲ要スルモノニテラズ仍モ或ハ區別  
 ヲ為スコト必要ナリ且ツ此事又ハ本条第二項  
 ノ理由ヲ示スニ當ツテ當然述ハ可キ所ノコト  
 ナリトス保持ノ訴權ハ二個人目的ヲ有スルモ  
 ノナリ其一ハ妨害ヲ止ムルニ在リ其二ハ神償



ヲ劣ナシムルニ在リ即チ僥全ヲ求ムルニ在リ  
第一ノ目的ヲ以テ保持ノ所權ヲ授記スル場合  
ニ於テハ其所權ハ全ク物上所有權ナリ何トナシ  
ハ此場合ニ於テ保持ノ所權ハ占有セル物ヲシ  
テ或ル地位ニ維持シ又ハ其地位ニシテ已ニ意  
更セラシムルトキハ復旧セシムルヲ以テ目的  
トスルベナリ然レドモ僥全ヲ目的トスル保持  
ノ所權ニ至テハ占有者ガ蒙ルリタル損害ノ賠  
償ヲ受クルニ止マレバ故ニ其所有權ハ至ク對人  
ヲ侵スナクナリ又何トナシハ妨害ヲ加ヘ又ハモ



ノ、過失ニ因テ生じたハ一個ノ債権ヲ主張ス  
ルニ過中州ノ如クナリ  
此故ニ保持ノ訴権ハ中性ノモノナルコトヲ認  
メサレ可カラズ中性ノ訴権トハ同時ニ物上訴  
権ト對人訴権トハ性質ヲ有スルノ謂ナリ此尚  
題タルヤ決セテ利益ナキモノニ執ラズ何トシ  
シバ占有ニ對シテ妨害ヲ加ヘタルモノが変更  
シタル場合ニ於テハ占有者ヨリ提起スルヤキ訴  
権ノ性質モ亦常ニ同一ナルコト能ハズ例令ハ  
隣地ノ所有者が占有ノ目的タル土地ニ工



事ヲ施シテ妨害ヲ加ヘタル後隣地ヲ他人ニ譲  
渡シタル如キ場合ニ於テ此妨害ヲ止メ且ツ已  
ニ爲シタル工事ヲ取除カシムル爲ニ占有者ヨ  
リ保持ノ訴權ヲ提起スル場存ニ於テハ隣地ノ  
新所有者ニ對シテ之ヲ爲スニトヲ得又ニ然レ  
ドモ隣地ノ旧所有者が工事ヲ爲シタル爲ニ占  
有者ノ蒙ルリタル損害ノ賠償ヲ求ムルニ當テ  
ハ新所有者ニ對シテ保持ノ訴權ヲ提起スルコ  
トヲ得ズ必ズヤ前所有者ニ對シテ此法求ヲ爲  
サシク可カラズ又此場合ニ於テハ其訴權ハ至リ



對人ノモノナリ此ニ於テ乎保持ノ訴權ハ至ク  
物上ノ物有テ亦之ル場合ノ三ニ止マリ對人ノ  
訴權ニ至テ然レ遂ニ私犯ヨリ生シ又ハ一種ノ訴  
權ナルニ止リ可シ  
新工告発ノ訴權ニ至テハ至ク物上ノモノナリ  
ト後ニ至テ着人可キ所ナリ急害告発ノ訴權  
ニ至テモ亦同一ノ決定ヲ為スコトヲ要ス之ニ  
及レテ回收ノ訴權ニ至テハ常ニ不法ノ所為ニ  
依リテ告発スルモノナリ故ニ其性質上ハ之  
對人ノ訴權ナリトス



本条第一項ノ法文ハ保持ノ占有訴權ヲ生ゼシ  
 ムルハ如女ナル者ノ占有ナルヤヲ明カニセリ  
 第一不動産ニ関シテハ保持ノ訴權ニ因テ占有  
 ノ確保ヲ告ヌコト固ヨリ疑ヒナキ所ナリ而シ  
 テ茲ニ不動産ト稱スルハ或ル人が占有ニ即チ  
 自己ノモノトシテ行使スル一切ノ不動産權ヲ  
 指シタルモノナリ故ニ所有權ノミナラズ用益  
 權地役權永借權質權ノ如キ皆然リト云ヌ  
 此故ニ疑ヒヲ生ヒ得ヌキハ不動産ノ占有ノ場  
 合ニ止マレノミ而シテ此場合ニ於テ或ハ動産



一 包括ト特定ノ動産トノ別ニ區別ヲ為シ可シ  
 一 小位ノ人モノ有テシトモ動産ノ包括ニ関  
 一 二テハ歐洲諸國ニ於テモ概子占取ノ訴権ヲ認  
 一 又テ例之心相続財産ノ動産ノ全部又ハ一部  
 一 又占取ノ為ニ保持人訴権ヲ認メ他人若シ相続  
 一 人若シハ受遺者ナリト主張シ妨害ノ所為ヲ為  
 一 之メ人トキハ是レニ對シテ保持人訴権ヲ提訊  
 一 スルコトヲ許セリ  
 一 本法ニ於テモ仍ホ此理論ヲ採用セリ且ツ特定  
 一 ノ動産ニ関シテハ特ニ即時時効ノ規定アルガ



為ニ此理論ヲ採用スルコト益々必要ト為リ  
特定不動産ノ実ニテハ多少ノ因近ヲ受カシ如何  
トナシハ不動産ノ実ニテハ占有ハ權原ニ均シキ  
効力ヲ有スルノ原則ナル故ニ不動産ヲ占有シ  
タルモノハ其占有ヲ得タルト同時ニ即時ノ時  
効ニ因テ真正ノ所有者トナリタルモノナリ此ニ於  
テ不動産ノ実ニテハ占有ノ權ニ對シ二個ノ障礙  
ヲ來タスハ一ニ至ル第一不動産ノ占有者ハ其占有其  
必短カキ場合ニ於テモ牽ク占有ノ三ナラズ真  
正ノ權利ヲ取得スルモノナリ故ニ若シ他人



レ妨害ヲ蒙ルリタルトキハ是レニ對シテ有ス  
ル所ノモノ有テ軍ニ占有訴権ニ止マラズニテ仍  
ホ卒權訴権ヲ有ス又ハ第一占有人妨害ヲ知シ  
タルモ如何ニ屢々自カラ惠賜物タル動産ノ占有  
ヲ得タルト有ル可キが故ニ此場合ニ於テハ  
妨害者モ亦是レニ由テ即時ノ時効ヲ主張シ而  
シテ占有人訴權破ルルモ仍ホ卒權訴ニ於テ  
勝利ヲ得ルコト有ルハ此ノ如クナルトキハ  
特定ノ動産ニ及ビテハ占有訴権ノ利益始ニド  
是レナキニ至ルカ如シ



然レトモ此ニ個ノ排他ハ未タ動産ノ占有ヲ妨  
害セラレズ人モノニ占有者權ヲ與フルノ必要  
ナキコトヲ明カナラシムルニ足ラザルナリ  
并ニ完全ナル權利ヲ有スルモノハ其一部分ノ  
權利ヲ亦有スルモノナリトシテ道理上ノ原則  
ナリ故ニ真正ナル所有者又ハ他人ノ權利者ニ  
之ヲ同時ニ其權利ノ占有ヲ有スル場合ニ於テ  
ハ權利ノ基本ニ基キ本權ノ訴權ヲ提起シ得ベ  
キト同時ニ單ニ占有者權外ノ訴權ヲ提起  
シ得ベキコト勿論ナリ



且ツ勤業ノ占有者ハ常ニ其占有ノ一事ニ由テ  
 即時ノ時効ヲ取得シ真正ノ権利者ナリト謂フ  
 コト未ダ必ズモ其当ヲ得タ人モニ非ラズ  
 何トナシモ實際ニ於テ即時ノ時効ヲ成就セシ  
 ムルニハ占有ガ法定ノモノニシテ客假ノモノ  
 ナラザルニシテトテ必要トスル人ナシテ亦善  
 意ノ占有ナリトテ必要トスルニ此場合ニ  
 於テハ善意ニハ單ニ占有者ノ確信スルノミテ  
 以テ足リトセズ更ニ正統業ニ基キタル善意  
 ナルコトヲ要ス然レニ保持ノ許權ハ善意及ビ



正橋筋ノ条件ヲ缺ク場合ニ於テモ之ヲ控却ス  
 ルコトヲ得心シ然ラバ巾子保持ノ占有許橋ハ  
 動産ノ占有者ノ為ニ其必要十ニト云フコトヲ  
 得ルコトヲモ此ニ個人場合ニ於テハ動産ノ占  
 有者ハ本橋許橋ヲ有セズト多トモ仍ホ占有許  
 橋ノ利益ヲ受ルルコトヲ得心シ  
 他ノ一方ニ於テ占有ニ對シ妨害ヲ為シタルモ  
 ノガ自カラ惠賄ノ目的物タル動産ノ占有者ト  
 為ルタル場合ヲ假定セシニ或ハ此占有者ハ自  
 然ノ占有者又ハ客假者ト占有者タルニ過ギザル



二ト有ルハ此場合ニ於テハ前ニ揚ゲ又ル動  
 産ニ突ニテハ占本ハ梳索ニ於テキ効力ヲ有ス  
 トノ算則ヲ援用スルハト能ハズ即チ即時ノ時  
 効ヲ得ルコト能ハズ雖令其占本が自出又ハ客  
 假ノ者ナラズニテ法定ノ者ナリトスルモ或  
 ハ正梳索ヲ取セズ又ハ善意ナラズルコト有ル  
 ハ此場合ニ於テハ到底其占本ハ三ニ由テ本  
 梳索梳ヲ有テニ提起スルコト能ハズ從ツテ此  
 場合ニ於テモ仍チ占本訴梳ノ利益ヲ受クルコ  
 ト有蓋十ルハ此



以上ニ述ベタル人場合ニ於テハ凡テ動産ニ関シ  
 テ占有者ガ軍ニ其占有ノ妨害ヲ受クルノ三十  
 日ニ猶ホ占有ヲ奪ハレテ保持ノ訴權ヲ提  
 起スルコトヲ假定セリ是レ蓋シ保持ノ訴權ハ  
 軍ニ占有ヲ奪ハレザル以前ニ於テ提知スルノ  
 三ニ止マラズ也之ヲ失ヒタル後ニ於テモ仍  
 ホ此訴權ヲ行ヒ得ベキコトヲ明カニセシガ夫  
 ツナリ蓋シ均シク占有者ニシテ回收訴權ト  
 名クル所ノモノナリトモ此訴權ト保持訴  
 權トノ區別ハ夫レニ於テ占有者ノ蒙リタル損害ノ



大小ニ由テ區別ヲ為スニ非ラズ寧ロ占有者ニ  
 損害ヲ生ゼシメ因テ訴権ヲ得セシメタル所為  
 ノ性質ニ基キテ區別ヲ為スモノナリ已ニ前段  
 ニ於テ述ベタル如ク保持ノ訴権ハ其目的トス  
 ル所占有ニ對シ他人ノ主張ヲ退ゾケテ其  
 主張ヨリ生ズル効力ヲ止メ若クハ已ニ生じた  
 ル損害ヲ補償セシムルニ在リ是ニ及ビテ回收  
 訴権ノ目的トスル所ハ占有ニ對シテ主張ノ制  
 限ヲ超エタル不法ノ所為ノ賠償ヲ為サシムル  
 ニ在リ其詳細ニ至テハ第ニ百四條ニ於テ之ヲ



説明之ハシ

第百一条

第ニノ占有者ハ新工告発許権ト名ク其適用

ハ第ニノ占有者ハ新工告発許権ニ比シテ甚ク制限セラレタ

元毛ノナリ

第ニ新工告発ノ許権ハ不動産ノ占有者ニシテ

第ニノ占有者ハ新工告発ノ許権ニ比シテ甚ク制限セラレタ

他ノ物上権ヲ行使スルモノニシテハ其所有権其

亦又

此ノ如ク此右取許権ヲ不動産ノ占有者ノ三ニ



英ハ又ル所以ノモハ他十ニ宜ニ不動産上ニ  
 或ル工事ヲ起シ若クハ之ヲ成就セシメタルト  
 キト島トモ之シガ劣ニ動産ノ占有ヲ害スルガ  
 如キコトハ殆ト是レ有ラザル可キヲ以テ十  
 日ツ新工告発ノ訴権ヲ提訴スルニハ工事か畢  
 ニ着手セラレ而シテ未ダ成就ニ至ラズ他日若  
 ニ其工事が成就スル乎若クハ着々其歩ヲ進ム  
 ルトキハ遂ニ不動産ノ占有者ニ損害ヲ加フル  
 ニ至ル心キ場合十ニトヲ必要トス若シ然ラ



42  
不<sub>レ</sub>テ已ニ損害生<sub>レ</sub>タル場合ニ於テハ是レ工  
事ノ爲ニ致<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>ノ妨害ヲ受<sub>ル</sub>ルモノニ<sub>レ</sub>テ實ニ  
保持<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>ノ提<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>心<sub>キ</sub>球<sub>合</sub>ナリト又<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>故<sub>ニ</sub>新  
工<sub>告</sub>矣<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>ノ保持<sub>レ</sub>ノ所<sub>レ</sub>ノ均<sub>レ</sub>シ<sub>ク</sub>右<sub>有</sub>ノ所<sub>レ</sub>ノ  
ナリト多<sub>ト</sub>モ妨害ニ失<sub>ツ</sub>テ提<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>ノモノ  
ニ<sub>レ</sub>テ其<sub>レ</sub>目的<sub>ハ</sub>一ニ未<sub>必</sub>ノ妨害ヲ豫<sub>防</sub>ス<sub>ル</sub>ニ  
在<sub>リ</sub>此<sub>ノ</sub>如<sub>キ</sub>損害ヲ<sub>レ</sub>テ未<sub>女</sub>生<sub>セ</sub>サ<sub>ル</sub>ニ止<sub>ム</sub>  
ル<sub>ハ</sub>当<sub>事</sub>者<sub>双</sub>方<sub>ノ</sub>爲<sub>ニ</sub>必要<sub>ナ</sub>リト又<sub>何</sub>トナ<sub>レ</sub>  
バ已ニ損害ヲ生<sub>ゼ</sub>シメテ後<sub>之</sub>レ<sub>レ</sub>が補<sub>償</sub>ヲ爲<sub>ス</sub>  
ハ始<sub>メ</sub>ヨ<sub>リ</sub>之<sub>ヲ</sub>生<sub>セ</sub>シメサ<sub>ル</sub>ニ若<sub>カ</sub>サ<sub>レ</sub>ハナ<sub>シ</sub>



本条ノ規定ニ從ハズ新工告發訴権ヲ提執スルハ  
 キ場合ハ隣地ニ於テ新工ナル工事ヲ知シ之レ  
 カ知ニ由有ノ妨害ヲ將來ニ來タズ可キ恐シ有  
 ルニトテ必要ト為ス然レトモ隣地ナル事情ハ  
 事必ズシモ新工告發ニ必要缺ク可カラサル  
 一箇ノ条件ト云フニトテ得ズ然リトモ甚  
 々相隔タル土地ニ於テ新工ニ工事ヲ起スニト  
 有ルモ之レガ知ニ由有ノ妨害ヲ將來ニ生ズ可  
 キ如キハ知ニ由實際ニ於テ是レアラサルハシ



本条ニ規定スル新工告発ノ訴権ハ軍ニ真成ノ  
所有者ノニ属スルモノニ非ラズシテ惟占有  
ヲ有スルモノニ於テモ均シク之ヲ提訴シ得ベ  
キニト固ヨリ辯ヲ俟タズ然レドモ此訴権ヲ提  
訴スルモノガ真正ナル所有者タルキト爲ト  
モ是レ決シテ所有者ノ資格ニ於テ之ヲ提訴ス  
ルニ非ラズ実ニ占有者トシテ之ヲ提訴スルモ  
ノナリ此点ニ於テハ務必注意ヲ爲スニト  
テ要ス即チ新工告発ノ訴権ハ法律上占有者ノ  
資格ヲ以テ提訴スルモノナリト爲トモ實際ニ

於テ占有者ノ占有者ニ比シテハ真正ノ所有者



於テハ軍使ノ占有者ニ比スレハ真正ノ所有者  
ヨリ之ヲ提托スルコト最モ屢々ナリトス蓋シ  
軍使由ル占有者ハ其權利ノ存在スル期間ニ付  
テ確半タラザル所アルカ故ニ真正ノ所有者ニ  
比スレバ隣地ノ新工ヨリ生スル妨害ニ付キ利  
害ノ関係ヲ有スルニト甚多尠ナケレバナリ事  
情此ノ如クナリニモ拘ハラズ新工告発訴権ヲ  
以テ一個人占有訴権ト為之所以ノモノハ實ニ  
此訴権ヲ提托スルモノハ其占有スル土地即チ  
隣地ニ於テ羔羊ニ付ル新工ノ為ニ損害ヲ受ケ



トトスル土地が自己ノ所有地又ルコトヲ證明  
スルノ必要ナク唯是レが法定ノ占有者又ルコ  
トヲ證明スルヲ以テ足レリト知フ  
新工告発ノ所橋ノ地役ノ章ニ於テ再ビ其適用  
ヲ看ルルニ蓋シ隣人が地役権ヲ有スルコトナ  
クシテ専リ之ヲ有スト主地ノ場合ニ於テ  
承役地ノ占有者ハ此地役ノ負担ヲ受ケレ其土  
地人自由ヲ至ラズルカ爲ニ此所橋ヲ提記スル  
コトヲ得心シ

第ニ百ニ条

本条ニ於テ規定スル第ニ百ニ条ノ占有者ハ橋ノ負担者ニシテ其負担ノ義務ヲ負フ



本条ニ於テ規定スル第三ノ占有訴権ハ急害告  
発ノ訴権ト名ク凡テ建物樹木等ノ如キ不動産  
物被其他ノ工事ノ朽壞又ハ傾倒等ノ為メ損害  
ヲ生ズ可キ場合ニ於テハ此訴権ヲ提  
起スルコトヲ得ルニ蓋シ真正ノ所有者ト單  
純ノ占有者トヲ問ハズ之レガ為ニ不動産ノ占  
有ヲ妨害セズルニ可クシクナリ此訴権ハ猶ホ  
二個ノ適用ヲ有スルモノニシテ且ツ此二個ノ  
適用ハ特ニ本邦ノ如キ水害及ヒ火災等ニ依テ  
屢々損害ヲ蒙ルル土地ニ在リテ甚ク緊要ナリ



ト又故ニ特ニ本条ノ明文ニ於テ之ヲ明示セリ  
急害告発ノ取扱ニ於テ原告ハ将来ノ損害ヲ豫  
防スルキ要分ヲ弁ヌ又キコト又ハ損害賠償ノ  
金ニ相当ノ保證人ヲ立ツ可キコトヲ判事ニ請  
求スルニ若シ妨害ガ已ニ迫レル場合ニ於テハ  
建物其他**工作物**ニシテ危害ノ原因タル可キモ  
ノハ直午ニ之ヲ取除クカ又ハ充分ノ修繕ヲ加  
ヘシムルヲ以テ目的ト爲ス而シテ是レ固ヨリ  
裁判所ガ弁ヌ可キ所ノコトナリト又若シ之シ  
ニ及ビテ危害未だ目前ニ迫ラズルニ及ビ隣人ガ



自中ヲ修繕ヲ爲スノ意思ナリト示シタル  
場合ニ於テハ此ノ如ク直接ノ處分ヲ施サハル  
モノ一ノ場合ノ爲ニ損害ノ保證金ヲ立テ置  
ルヲ以テ是レトスル而已キニ是レヲ以テ  
途中ニ前者ニ傷レリト爲之  
急害告発ノ訴権ハ水ノ使用ニ関シ地役ノ事項  
ニ於テ特別ノ適用ヲ受ケルコト有リ  
第二章 三条  
立法者ハ本条ニ於テ占有者カ第一及ヒ第二ノ  
占有訴権ヲ提スルニ爲ニ備フタキ資格若クハ



条件ヲ定メ又リ本条ニ掲ガ又ル条件ノ中第一  
并ニ并三ハ段ニ前段ニ於テ説明シ又ル所ナリ  
トス平穩公然及ビ法定ノ三条件是ナリ法文ノ  
定メ又ル条件ニ由テ之ヲ考フルハ自然ノ占有  
者又ハ客假ノ占有者ハ保持ノ占有訴権ヲ有セ  
ル且ツ新工告発ノ訴権ヲ提起スルコトヲ得又  
縦令法定ノ占有者又ルモ其占有が強暴ニ基ク  
カ又ハ公然ナラザル場合ニ於テ是レト異ナ  
ルコトナシ

最後ノ条件即チ占有が一十年以來継続シ又ル

コトヲ要スルノ一条件ニ至テハ本条ニ於テ



コトヲ要スルノ一条件ニ至テハ本条ニ於テ始  
メテ規定スル所ノモノナリ立派者ハ占有ニ附  
着セシメタル第一第二ノ利益ノ爲ニ此一ヶ年  
間継続ナレバ条件ヲ必要トセズ即チ所有権ノ推  
定ヲ受ケ及ビ果実ヲ取得スル爲ニハ必ズ此モ  
占有カ此ノ如キ継続ヲ有スルコトヲ必要ト爲  
サズ  
又他ノ点ヨリ之ヲ考フルニ不動産ノ取得時効  
ヲ成就セシムル爲メニハ未タ占有が一ヶ年間  
継続シタルヲ以テ足シリト爲ス。不動産ノ時効ニ



冥之テハ此ノ如キ継続ヲ望ムハ甚ク重キニ  
カルモノニテ果実ノ取得ノ為メニハ此条件  
ハ實ニ嚴ナリト謂ハサルヲ得ズ故ニ此等ノ点  
ニ於テ此条件ヲ必要ト爲サルモ保持ノ訴權  
及ビ新工告発ノ訴權ヲ提起シ不勤産ノ白有者  
ガ自己ノ蒙ル妨害ヲ退ケント欲シテ訴ヲ爲  
スニハ此一年間ノ継続ナル條件ヲ必要ナリト  
シ又其継続ハ一年間ヲ以テ充分ナルモノト認  
メタリ  
一年ノ期間ハ至当ノモノト謂ハサルヲ得又固



ヨリ期間ハ各人ノ看ル所ニ從ヒ或ハ之ヲ長ク  
スルコトヲ得ベク或ハ之ヲ短クスルコトヲ得  
ベシ而シテ必ク之モ弊害アルモノニ非ラズ然  
レドモ此種類ノ占有許権ヲ提起スルニハ其占  
有ハ一定ノ時間継続シタルコトヲ必要トスル  
ニ至テハ専カス可カラサル所ナリ若シ然ラズ  
トセバ占有許権ニ依テ被告ト爲リ又ハ若モ亦  
直クニ自カラ同一ノ物同一ノ権利ニ依キ占有ヲ  
主張シテ占有許権ヲ提起スルニ至ルベク此場  
合ニ於テ常被<sup>ル</sup>占有ハ孰シカ尤モ古ク孰



レカカモ長キヤヲ知ルコト甚ク因難ナル可ケ  
レハナリ

本条ニ於テ法律ガ一年間ノ継續ヲ一個ノ條件  
トシテ定メタルハ不動産ノ包括又ハ不動産ノ関  
スル占有移換ノ場合ニ止マレ若シ特定不動産ノ  
占有移換ノ場合ナルトキハ法律ハ之レが先ニ  
占有ノ継續ヲ必要トセズ何トナシハ特定不動産  
ニ関シテハ取得時効ト垂トモ已ニ何等ノ期間  
ヲ要セズニテ成就スルモノナリ時効スル此人  
如クナル以上ハ占有移換ノ行使ニ任テノミ占



有ハ健漢ヲ必要ニ心キ理由ハ茲ニト是レ有ラ  
ハレハ心ナリ或モ其ノ由ニ由テ其ノ由ニ由テ

第百四第ニテハ人ニ至格又ハ一職ノ對奪ニ由テ

本条ニ規定スル回收ノ称權ハ軍ニ占有ハ全部

又ハ一部ヲ失ヒタル場合ニ於テ直キニ提配シ

得心キモノニ執テ不何トナレハ此ノ如キ場合

ニ於テハ占有ノ侵奪ハ一個人ノ妨害ニ外ナラズ

又特ニ妨害ノ最モ大ナルモノナリ故ニ占有者

ハ保持人訴權ニ因テ常ニ此占有ヲ回復スルコ

トヲ得心シ占有ノ侵奪ヲ為スニ当リ暴行脅迫



又ハ訖新等ハ方法ヲ用ヒタル場合ニ於テ始メ  
テ回收人訴権ヲ提起スルコトヲ得心シ此故ニ  
回收人訴権ハ右人侵奪ニ基クモ人ニ引ラス  
ニテ実ニ侵奪ニ用ヒタル方法ノ私犯ノ性質ニ  
基クモ人ナリ此特殊ノ性質ハ本条及ヒ次条ニ  
於テ之ヲ明示セリ本条第一項ハ回收訴権が前  
ニ掲ケタル如キ私犯ノ性質ヲ有スル三個ノ要  
素ヲ用ヒタル右人ノ全部又ハ一部ノ侵奪ヲ爲シ  
タル場合ニ於テ提起セラルルヤキ者タルコトヲ  
明記セリ且ツ回收人訴権ハ第二項条ニ於テ已



二示之及凡財產ノ三種即チ特定不動産包括動  
產特定動產ノ五種者ニ屬スルモノナリコトヲ  
示セリ  
特定動產ト云フニ天竺國收メ所權又許ス可キコ  
ト保持ノ所權ニ比スレバ重ク疑ヒナシ或ハ動  
產ニ冥ニテハ占取ハ權業ニ均シキ効力ヲ有ス  
トノ意則チ以テ批效ヲ與スモノナリト垂トモ  
之レカ安ニ決シテ占取所權ヲシテ其用ナキニ  
至ラシムルモノニ批ラズ何トナシバ田收ノ訴  
權ハ軍ニ去ノ原則ヲ援用シ得ニキ者ノ三ニ之



子附共セラレタルニ此ヲ不シテ容假ノ占有者  
 小多トモ仍ホ此ヲ檢テ提提スルニトヲ得ハ  
 (卷第六)而シテ容假ノ占有者ハ決シテ動産ノ  
 即時時効ノ原則ヲ援用スルニトハ成ルナリ  
 又本条第一項ニ依ルハ占有者が回收被檢ニ因  
 テ侵奪セラレタル占有ヲ回復セシムルニハ  
 占有者自カシテ當初暴行強迫又ハ過失ヲ以テ占  
 有ヲ取得シタル者ニ非ラサルニトヲ必要ト爲  
 又然ラザレハ侵奪者ヲ檢存シテ獨リ此占有者  
 ノミヲ保護ス可キ理由アラザレハナリ同一ノ



地位立ツモ二人アル場合ニ於テハ現在人占有  
 者ヲ以テ前占有者ニ優シモ人ト安之ハ古来  
 有名ナル格ニシテ實ニ右ノ場合ニ於テ適用  
 不可キ所人モノナリ然レトモ回收訴訟ニ於テ  
 余先父ノ占有者ノ暴行強迫等ノ如キ私犯人性  
 質ヲ有スル所為ノ為ニ回收訴訟ヲ失ハニヤル  
 ニハ其暴行強迫等ノ所為が被告ニ對シテ必ズ  
 ニモ為サレタル者ナルニトテ母セズ假令原告  
 が曾テ此等ノ強暴ヲ施シタルコト有ルモ被告  
 ニ對シテ然ルニ非ラズシテ他人ニ對シテ之ヲ



用ヒ又ハ場合ニ於テハ被告ハ之ヲ以テ原告ニ  
對抗スルノ權利ヲ有セサルハシ蓋シ此等ノ瑕  
疵ハ已ニ第百八拾三条ノ下ニ於テ述ベタル如  
ク元來関係ノモノニシテ絶對ノモノニ非ラサ  
レハ殊リテ新法出シニ面テ新法與テ  
本条第一項ハ回収訴權ト其他ノ占有訴權トノ  
別ニ一個ノ大ナル差異ヲ設ケタリ已ニ述ベタ  
ル如ク保持ノ訴權新工告發ノ訴權及び急害告  
發ノ訴權ハ至ク物上ノ訴權ニシテ之ヲ詳言ス  
レト凡テノ占有者ニ對シ提記スルコトヲ得心



ク程々其占有者が妨害又ハ新工人本人又ラサ  
ル場合ニ於テモ亦然リトス惟占有ヲ承継シ而  
シテ自カ之妨害又ハ工事ヲ止メサレハ即チ此  
ノ事ヲ以テ占有者ノ被訴人被告又ラサレテ得ズ若  
シ損害賠償ノ請求ヲ為スニ當テハ直接ニ妨害  
ノ原因タルモノ、三之レガ被告タルハ之令因  
收訴權ニ付テ考フルニ右ニ求フル所ト大ニ異  
ナルモノアリ蓋シ此訴權ニ由テ占有ノ回復ヲ  
請求スルモ或ハ損害ノ賠償ヲ求ムルモ凡テ因  
收ノ訴權ハ對人ノ性質ヲ有スルモノナリ故ニ



侵奪者ハ包括承継人ニ對シテハ猶ホ之ヲ提訊  
スルコトヲ得ル之何トナシ人包括承継人ハ  
權者ノ法律上ノ人格ヲ承継シ而シテ其一切ノ  
法律上ノ義務ヲ承継スルモノニシテ其義務ノ  
行為ニ基クモノナシト私犯ニ基クモノナシト  
ニ因テ區別スルコトナシ然レトモ買主又ハ受  
贈者ヲ如キ特定ノ承継人ニ對シテハ回收訴權  
トシテ提訊スルコトヲ得ル之何トナシト特定承  
継人ハ原權者ノ法律上ノ人格ヲ承継スルモノ  
ニ非ラズ亦シテナリ然レトモ承継人又侵奪ノ要



為人共通者十人場合ニ於テハ其一身ニ於テ  
回收許權ノ被差スルコトヲ受カレサレ可シ  
第ニ百五条

本条ニ於テモ亦回收許權ト保持許權及ヒ新工  
告發許權ト人間ニ性質上ノ二個人差異アルニ

トヲ示セリ

第一回收許權ト單ニ法定ノ占有者ニ屬スルノ

三十ヲ又仍ホ客假ノ占有者ニモ屬スルモノナ

リ而シテ客假ノ占有者ヲシテ回收許權ヲ有セ

シムル理由ハ次ニ掲グルル所ノ如シ客假ノ占有



老ハ尤モ屬々他人ニ對シテ占有物管轄ノ責任  
ヲ有スルモノナリ然レニ其占有ノ客假ナルカ  
為ニ自己ノモ大抵シテ之レカ因彼ヲ為スコト  
能ハサズ他モ若シ他人ノ侵奪ヲ受ケル場合ニ  
於テハ少ナクモ其客假ノ占有ヲ因彼スルコト  
ヲ得セシメ可カク又是レ其一大異又客假  
ヲ占有者ハ他人ノ利益ヲ於テ他人ノ名義ヲ以  
テ占有ヲ為スモノナリ故ニ尋々其他人ノ為  
ニ占有許權ヲ提記スルコトヲ得セシメ可  
ク又是レ其ニナリ

第二回及所爲ヲ是レニシテ其目的ヲ爲スルニ



十又呈其二十

算二回收訴権ヲ提起スルニハ其目的タルモノ  
 が不動産ノ場合ニ於テモ仍亦一年前ノ占有  
 ヲ要スルモノニ侵奪ヲ受ケタルモノハ必ズ先  
 ツ其舊地位ニ復セシメラルニトテ要ストハ  
 正義ニ合シタルモノナラズ回収訴権ニ占有ノ  
 継続ヲ必要トセザルモ亦此原則ノ適用ニ外ナ  
 ラザルナリ回収訴権ヲ提起スルモノハ此原則  
 ニ因テ被告ノ地位ヲ回復スルニトテ得心シテ  
 之ヲ被告ノ地位ノ利益アルニトハ前段ニ於テ  
 述ベタル所ナリ



急害告矣ノ被檢ハ右ニ述ベタル本ニ述ベタル

回收ノ被檢ノ如ク私犯ノ要否ヲ以テ基礎ト為

井知ト為トモ其目的トシテ所人等財産ノ危害

ヲ豫防スルニ在ルガ故ニ回收ノ被檢ト均シク

容假ノ占有ニ<sup>著</sup>モ辱之ヘク且ツ此被檢ヲ有スル

ニハ占有ガ一ケ年の継続ニタルコトヲ必要ト

セ井凡可キハ当然ノコトナリトス

以上ニ説明シ来シ入諸條ノ占有被檢ハ一トシ

テ自然ノ占有者ニ属スルコトナリ何トナレハ

自然ノ占有者ハ何等ノ檢利ヲ有セズ又法律上



自他ノ占有者ハ何事ノ権利ヲ有セ又法律上

何事ノ推定ヲモ受クルコト能ハサレハナリ

第二章 六条

一人ノ占有者が占有権ヲ提起スルニ当テヤ

其被告タルモノモ亦實際ニ於テ属ク占有者ト

看做サルコトヲ得心シ此ニ於テ乎占有者ト

ノ行使ニ関スル期間ハ儘モ古キ占有者ヲ以テ

新タナル占有者ニ勝ツコトヲ得セシムル方法

ヲ以テ計算セサル可カラス然ルニ保持ノ占有

訴権ニ於テ原告タルコトスル者ハ少クモ其妨

害以前ニ於テ一年ノ占有ヲ失シタルコトヲ



要又故ニ其訴権ヲ提托スル人必クヤ妨害ヨリ  
ニテ一ケ年以内ニ於テセザル可カラズ然ラサ  
レハ保持訴権ノ場合ニ於テ被告モ亦其占有ノ  
継続ニ由テ保持訴権ヲ提托スルコトヲ得心ス  
茲ニ於テ乎曰占有者ハ遂ニ占有者ノ劣ニ勝テ  
制セテル心シ  
回收訴権ニ至テハ左ノ系則ニ常ニ嚴正ノ適用  
ヲ受クルモノニ於テ不固ヨリ其訴権が一ケ年  
以内ニ提托セラルハコトヲ要スルハ諦ヲ俟タ  
ズト云トモ此場合ニ於テハ侵奪ヲ受ケタルモ



ノ、占有が一ヶ月間継続スルヲ要セサルガ故  
ニ、回収訴権ニ於テ勝利ヲ得ルモノハ必ズシモ  
是モ久シク占有スルモノニ非ラサルベシ、例令  
バ三ヶ月間占有シタル後他人ノ爲ニ暴行ニ由  
テ占有ヲ奪ハシタル場合ニ於テ前占有者ハ侵  
奪ノ後十一ヶ月ヲ経テ回収ノ訴権ヲ提訴シタ  
リトセシ此場合ニ於テ真占有者ハ其占有シタ  
ル時間途カニ占有者ニ比シテ長シト多トモ此  
訴訟ニ於テ勝利ヲ得ルモノハ侵奪ヲ受ケタル  
前占有者ナル心シ此ノ如キ原則ニ對シテ例外



此所以ノモクハ他トシ他人ノ占有ヲ侵奪シ  
女ルモハ法律ノ之ヲ退スルコト他人ノ占有者  
ト曰一トシテハ依ル力アリ不違出スル  
新工告矣ハ新橋ニ関シテハ右ノ京則ハ充分ニ  
其適用ヲ受ク且モノナリ此新橋ヲ以テ京告又  
ラシトスル者ハ必ズ一ケ年間継続シタル  
占有ヲ有セザル可カラズ而シテ此新橋ハ工事  
ヲ始メタル後一ケ年ヲ過グルモ建設スルコト  
ヲ得心ニトモ未トモ仍ホ此ノ如クナルニハ  
人先メ妨害ヲ受ケテヨリ未タ一ケ年ニ滿タ

ルコトヲ必要トスルモノ一ケ年以内ニ



ルコトヲ必要トス且ツ一ヶ年以内ニ於テモ若  
シ工事ガ落成シタルトキハ最早新工告発所権  
ヲ提訴スルコトヲ得ズ然レトモ此場合ニ於テ  
ハ妨害ヲ受ケタルトキヨリ一年ノ間ハ保持ノ  
右所訴権ヲ提訴スルコトヲ得ベシ  
急害告発ノ訴権ニ関シテハ危害ノ存在スル間  
ハ訴権ノ原因常ニ生ズルモノニシテ強シト時  
々刻々新タニ生ズルモノト認フコトヲ得ベシ  
此故ニ工作物ニ修繕ヲ加フル乎又ハ全ク之ヲ  
取除クニ非ラザレトモ此訴権ノ行使ヲ止ムルコ



トヲ得ニ若シ建物ノ壞倒等ニ由テ損害已ニ生  
シタルトキハ急害告発ノ旨有訴権ハ其目的ノ  
滅失ト共ニ消滅スルモノニテテ損害賠償ノ對  
人訴権ヲ以テ是レニ代フ可キモノトス

### 第二百七条

今右有ニ関シテ当事者双方ヨリ争ヒテ起シタル  
場合ニ於テ判事タルモノハ当事者ノ権利ノ基  
本ニ関スル換景其他ノ證據ニ因テ孰レノ主張  
スル所ガ果シテ至当ナルヤヲ決ス可キニト最  
モ其当ヲ得タルモノ如シ然レトモ法律ハ現ニ



之ヲ禁セリ而シテ其理由ハ主クモノハ次ニ  
掲グル所ノ二点ニ在リ  
第一保持許權及ヒ新工告発訴権ノ場合ニ於テ  
ハ敢テ原告人占有ハ正當ノ者ナルヤ否ヤヲ決  
スルコトヲ要セズ惟其占有ハ法律ニ定メタル  
性質ノ期間中ヲ以テ存在スル者ナリヤ否ヤヲ  
決スヘシ又被告ノ方ニ於テモ其如ヘタル妨害  
若クハ侵奪ハ權利ニ基キテ之ヲ爲シタル者ナ  
ルヤ否ヤヲ究ムルコトヲ要セズ然レトモ惟果  
シテ妨害又ハ侵奪ヲ爲シタル者ナリヤ否ヤヲ



決之ルニ止マレバ新工告発ノ訴権ヲ提起シ  
タル場合ニ於テハ其工事が原告ノ占有ニ妨害  
ヲ加フル事ト人々懼レテ止マレバ夫レ以  
テ足レリト云急害告発大訴権ノ場合ハ法律ニ  
定メタル性質及ビ因果因存在スルヤ否ヤヲ決ス  
ルヲ以テ足レリトス故ニ判事タルモノ若シ当  
事者双方ノ真正ナル権利ノ有無ヲ審理シ其如  
何ニ由テ占有訴権ノ当否ヲ決スルガ如キハ当  
事者ノ請求セザル所ノ表ヲ裁判スルモノニシ  
テ全ク越権ノ事為ラズモ人ナリ

第二五節 訴権ニ関スル事 裁判官之職務ニ関スル事



第二占有訴権ニ関シテハ裁判官轄モ亦本権ト  
訴権ト異ナリ是レ蓋シテ其問題ハ甚カ簡單ナ  
ルノミナラズ其審理ハ迅速ナルコトヲ要スル  
ガ爲メニ是レ方當事者ニ甚ク接近セル下級ノ判  
事ノ権内ニ属セリ即チ其訴権ガ物上ノ者ナル  
トキハ占有訴権ノ目的タル不動産所在地ノ区  
裁判所之レが管轄権ヲ有シ若シ對人ノ訴権ト  
ルトキハ被告ノ住所地ノ区裁判所之レが裁判  
権ヲ有ス此故ニ区裁判所判事が軍ニ占有ノ点  
ノミヲ審理スルコトナク權利ノ基本ニ関シテ



審理ヲ為スガ如キハ誰令權利ノ基本ニ付キ裁  
判ヲ與ヘルコトヲ得トシモ實ニ其管轄以外  
ニ出デ越権ノ虞有ラスモノト謂ハサルヲ得  
本條并ニ之ヲ以テ之ヲ説明スルニトヲ得心  
即チ判  
事ニ之ヲ若シ困難ヲ辨ズル為ニ訴訟ヲ中止  
而シテ適當者ヲ以テ先ツ本権ノ訴權ヲ提起  
之ルカ判決ヲ受ケシメトシトキハ實ニ裁  
判ヲ拒ムモノト謂ハサルヲ得之裁判ヲ拒ムハ

不  
裁  
判  
ヲ  
禁  
フ  
ル  
ニ  
比  
シ  
テ  
一  
部  
法  
律  
ノ  
禁



不完全ノ裁判ヲ禁フルニ比シテ一層法律ノ禁  
又ル所ナリ何トナレバ一變裁判ヲ禁ハスルト  
キハ假令不完全ナルモ更ニ之レガ変更ヲ求ム  
ルノ道アリバナリ  
最後ニ注意シタキハ一旦本橋訴訟權ニ関シ裁判  
ヲ受ケタルトキハ最早ト有訴權ニ関シテ裁判  
ヲ受ケルノ必要ナシ(参考カニ百九条)何トナレバ  
本橋ノ争ヒ既ニ決シタル後更ニ右有ノ争ヒヲ  
判決スルニ至ク理諦ヲ轉倒スルモノナレバナ  
リ



第二三八条

本条ノ規定ハ前条第三項ノ規定ト照應スルモ  
ソナリ前条第三項ノ規定ハ本権ノ訴起リタル  
後占有ノ訴起リタル場合ニ於テ本権ノ訴ヲ中  
止スベキコトヲ余心本条ハ占有ノ訴起リタル  
後本権ノ訴起リタルトキハ占有ノ訴ノ確定判  
決ニ至ルマデ本権ノ訴ノ訴訟手続ヲ中止スベ  
キコトヲ余ゼリ然レドモ其規定ノ理由ニ至テ  
ハ前条末項ノ理由ト同一ナラズ何トナレハ前  
条ニ於テ占有ノ訴ノ判決ヲ猶豫スルコトヲ禁



正父ルハ一ニ判事又ルモノ当事者ノ請求セザ  
ル点ニ付テ判決スルコトヲ得サルニ由ル可シ  
ト至トモ当事者が請求セ得ル所ノモノハ此  
ノ如ク制限セラシ又ルモノニ非ラズ請求ノ当  
否ハ暫ラノ措キ苟クモ自カラ權利アリト信ス  
ル所ノ者ハ凡テ請求スルコトヲ得心シ故ニ実  
際ニ於テ当事者ノ一方が占有ノ訴ヲ告シ他ノ  
一方が本権ノ訴ヲ告ス如ク同時ニ二個ノ請求  
アリ得ルキナリ

此ノ如キ場合に於テ占有ノ訴ノ確定判決ニ至



ルマデ本権ノ訴ノ訴訟手續ヲ中止スル理由ノ  
主タルモノハ實ニ占有ノ事又ハ常ニ迅速ヲ要  
スル性質アルモノナリハナリ占有ニ関スル争  
ヒアルニ當テヤ當事者双方ハ互ニ不当ノ處爲  
ヲ爲シ或ハ暴行ヲ施シ争鬪ヲ爲シ至人如  
キコト實際ニ於テ數カラサレ所ナリ之ヲ要ス  
ルニ各人自カラ裁判ヲ下シ裁判所ノ判決ヲ俟  
タサレ頃キアルハ實ニ占有ノ事ニ関シテ最モ  
著シキ所ナリ且ツ占有ニ関スル證據及ビ占有

ニ對スル妨害ノ證據ノ如キハ其性質上時日ヲ



ニ對スル妨害ノ証拠ノ如キハ其性質上時日ヲ

経過スルトキハ權利ノ基本ノ證據ニ比スレド

甚カ容易ニ且ツ最モ速カニ消滅ス可キモノナ

リ此等ノ理由アリガ故ニ占有ノ事ヲ審理ニ判

決スルハ本權ノ訴ニ比スレハ尤モ迅速ナラサ

ル可ナラズ

已ニ前段ニ於テモ述べタル如ク占有ノ訴ニ於

テ勝利ヲ得タルモノハ本權ノ訴ニ於テ被告ノ

地位ニ立ツ又ニ故ニ先ヅ占有ノ訴ヲ決シ本權

ノ訴訟手續ニ於テ各當事者ヲ以テ其至當ニ有

スル地位ヲ得ルノ方法ヲ得セシムルハ尤モ其



當ヲ得タルモノト謂ハサル可カラズ  
本条ノ明文ニ依テ考フルトキハ右ノ訴ト本  
條ノ訴ト同一ノ裁判所ニ提起セラレハ右ノ有  
ルニ此事タルヤ前ニ述ベタル所ニ由テ考フ  
ルニ甚カク不可思議ナルカ如ク二個ノ訴ノ中一  
個ニ付テハ常ニ其裁判所ハ管轄ヲ有セサル可  
キモノ、如シ然レトモ必ズシモ然ラヌ何トナ  
シト若シ右ノ訴ガ第一審ニ於テ区裁判所ノ  
判決ヲ受ケ当事者ノ一方が是レニ對シテ地方

裁判所ニ控訴ヲ為シ又ハ高等法院ノ訴格メテ提



裁判所ニ控訴ヲ為シ又ハ等々後ノ訴格ニテ記

リ又ル場合ニ於テハ此地方裁判所ハ孰レノ場  
合ニ於テモ管轄權ヲ有スルコト明カナリ又動  
産ノ占有ノ場合ニ於テ本橋訴格ヲ被告人住家  
ノ区裁判所ニ提起シ而シテ同一ノ裁判所ニ於  
テ同一ノ動産ニ関シ占有ノ訴已ニ起リ又ル場  
合アリ可シ是レ又共ニ同一裁判所カ管轄權ヲ  
有スル所ナリ従令本橋ノ訴ト占有ノ訴格トヲ  
提起セラレ又同一ノ裁判所カ其訴ノ一個ニ於  
テ管轄ヲ有セザル場合ニ於テモ管轄違ノ抗辯  
ヲ以テ第一ニ是レニ對抗シ得ヤキニ此ラ又必



ルヤ本条ニ基キ本條ノ訴ノ中止ヲ抗辯スルコ  
トヲ要ス何トナシハ本条ノ適用ハ管轄ノ問題  
ニ比スルニ尤モ容易ニ決シ得又キ所ノ者ナシ  
ハナリ之ヲ決スルニ當テハ惟本條ノ訴ト否有  
ノ訴ト同一ノ者ニ對シテ提起セラレ又ルコト  
ヲ認メ而シテ其本條ノ訴ヲ中止スルハ即充足  
ルモノナリ  
本条第二項ノ法文ハ本條ノ訴ニ於テ被告又ハ  
者ヲシテ更ニ原告トシテ占取ノ訴ヲ起スコト  
ヲ許セリ是レ又其當ヲ得タルモノナリ若シ此



ヲ許セリ是レ又其當ヲ得タルモノナリ若シ此

規定ナキトキハ占有ノ妨害ヲ爲シ若クハ侵奪  
ヲ爲シタルモノハ自カラ進ニテ本権ノ訴ヲ起  
シ是ニ由テ損害ノ補償ヲ免カレ占有者ヲシテ  
占有者ノ利益ヲ失ハシムルニ至ル必之ヲ  
防カノ道ハ本条ノ規定ヲ設ケ此ノ如キ場合ニ  
於テモ仍ホ占有者ハ更ニ占有者ノ提訴ニ本  
権ノ訴ニ先ツテ占有ノ争ヒヲ決セシムルノ外  
ナシ

第二百九条

本条ノ規定ハ甚ク嚴ニ行フルモノ、如シ然レ



トモ次ノ理由ニ因テ之ヲ解ズルコトヲ得ハシ  
他人ノ物ニ占有ノ妨害ヲ受ケ若クハ之ヲ侵奪  
セラレ因テ占有ノ訴権ヲ以テ請求ヲ知シ得ハシ  
ト信ズル当事者が此訴権ヲ提起スルコトナク  
之ヲ存続ノ訴権ヲ提起シタル場合ニ於テハ当  
事者自ラ其占有が法律ニ定メタル条件ヲ備  
ヘサルコトヲ認め又ハ其蒙ルリタル妨害若ク  
ハ侵奪ハ甚カ重大ノ者ニ非ラズニテ未如以テ  
占有ノ訴ヲ起スノ理由トスルニ足ラズ然テ暗  
黙ニ此方法ヲ妨害シタルモノト認ムルコトヲ得



黙ニ此方法ヲ抑棄シタルモノト認ムハナク得

不

然レトモ此理由ニ依テ正当ノ範圍外ニ馳セテ

ルヲ要ス蓋シ已ニ本條ノ訴ヲ却シタル場合ニ

於テ占有ノ訴權ヲ抑棄シタルモノト看做スハ

本條訴權ヲ提出スルノ當時未タ提出セザリシ

占有ノ訴權ニ冥之ルモノニシテ已ニ提起シタル

ル占有訴權ニ冥シテハ此ノ如キ黙示ノ抑棄ヲ

告シタルモノト認フコトヲ得ズ此故ニ本條ニ

於テハ已ニ提起シタル占有訴權ニ冥シテハ原

告タルト被告タルトヲ問フコトナク之ヲ健続



之得又キコトヲ明記セリ而シテ此想定又ルヤ  
至リ前条ノ法文ヲ以テ二個ノ訴權同時ニ提訴  
セラシ又ル場合ニ於テハ常ニ本權ノ訴ノミヲ  
中止スト言ハル精神ニ符合スルモノナリ  
假令本權ノ訴ニ於テ常告ト为リ又ハモノガ其  
以前ニ於テ占有ノ訴權ヲ提訴セサリシトスル  
モ若シ本權ノ訴ヲ起シ又ハ後自己ノ占有ノ妨  
害若クハ侵奪ヲ受ケ又ル場合ニ於テハ之ヲ理  
由トシテ更ニ占有ノ訴ヲ起スハ其爲シ得ベキ  
所ナリ法律ノ明文ニ於テ道理ニ從ヒ占有訴權



所ナリ法律ノ明文ニ於テ道理ニ從ヒ占有ノ推定

ノ物棄テ推定スルハ惟本権ノ許以前ノ事實ニ  
冥スルノミ

若シ本権ノ訴権ノミ先ツ提起セラシムル場合  
ニ於テ敗訴シタルモノハ原告タルト被告タル  
トヲ向ハズ更ニ占有ノ訴権ヲ提起スルニトヲ  
得ズ本条第一項ニ掲ケタル此決定ハ容易ニ其  
理ヲ解スルニトヲ得心シ蓋シ占有者ニ法律ノ  
與ヘタル権利ト訴権トハ至ク所有権ノ推定ヲ  
以テ基礎ト為スモノナリ然ルニ所有権ノ事又  
ルヤ本権ノ訴ニ於テ判決ヲ受ケ其存スル所明



疏ナル以上ハ更ニ在在ノ許ヲ以テ之ヲ争フ可

カラナルコト勿論ナリ

其理由此ノ如クナル故ニ在在亦換提提ノ換

利ヲ喪失スルコトハ率ニ疏定ノ敗訴ニ歸シ又

ルモノニ適用スルニ從テ縱令本換ノ訴ニ実シ

判決アルモノ未タ故障控訴又ハ上告等上訴ノ道

アルトキハ此判決ノ為メ在在亦換ノ行使ヲ妨

ゲラルハコトナシ

### 第ニ百於条

当事者等が訴訟ヲ為スニ當テハ必ズ一